徳川家茂は柩となって、徳川慶喜は生きて、どちらも船で江戸へ戻った

慶応二年（1866年)、将軍の徳川家茂は大坂城で亡くなりました。その柩は船で戻り、「濱御庭」に上陸します。

鳥羽・伏見の変で大坂方の兵が敗れ、明治元年（1868年）正月、徳川慶喜は艦で品川沖に戻りました。そして小舟で、「濱御殿御庭」に上陸しました。

家茂は柩となって、慶喜は生きて、どちらも船で戻ってきたのです。

In the second year of Keiō, 1866, the shogun Tokugawa Iemochi died at Osaka Castle. His coffin came back by ship and was landed at the "Hama Oniwa".

After the forces from Osaka were defeated at Toba-Fushimi, in the first month of the first year of Meiji, 1868, Tokugawa Yoshinobu came back by warship to the waters off Shinagawa. He then landed by small boat at the "Hama Goten Oniwa".

Iemochi came back in a coffin and Yoshinobu came back alive, both by ship.

慶応二年（1866年)、将軍家茂は大坂城で亡くなりました。九月六日の達（役所が出した通知や命令）には、亡骸がいま船で品川沖に着いた、と記されています。「今朝濱御庭へ御上陸」（けさ浜御庭に上陸)、その日のうちに江戸城の西丸に柩が着いた、と続きます。

『徳川慶喜公伝』によると、鳥羽・伏見の変で大坂方の兵が敗れた日、慶喜はこう言ったそうです。「事敗れぬる上は、東歸して更に講ずべき手段もあらん」（敗れた以上は、東へ帰れば、さらに打つ手もあろう)。『続徳川実紀』の引く記録によると、明治元年（1868年）正月八日、慶喜は艦で天保山沖を発ち、十一日に品川に着きました。

その十一日、勝海舟は浜の海軍所へ出向き、そこで初めて、伏見で起きたことの顛末を聞いた、と勝の日記に記されています。勝が詳しく聞こうとしたときのことを、日記はこう続けます。「諸官唯青色、互に目を以てし、敢て口を開らく者無し」（役人たちは青ざめて目を見交わし、口を開く者はいなかった)。

松平勘太郎の談話によると、十二日、慶喜は端艇という小舟に乗ったそうです。そして「濱御殿御庭へ御上陸」（浜御殿の御庭に上陸)、しばらく休んだあと、馬に乗って城へ帰りました。

In the second year of Keiō, 1866, the shogun Iemochi died at Osaka Castle. An order of the sixth day of the ninth month records that the body had just arrived by ship off Shinagawa, "landed this morning at the Hama Oniwa", and that the coffin reached the Nishinomaru of Edo Castle that same day.

According to the Tokugawa Yoshinobu-kō Den, on the day the forces from Osaka were defeated at Toba-Fushimi, Yoshinobu said: "Now that things have failed, if we return east there may be further means to take." According to a record quoted in the Zoku Tokugawa Jikki, on the eighth day of the first month of the first year of Meiji, 1868, Yoshinobu left the waters off Tenpōzan by warship, and arrived at Shinagawa on the eleventh.

According to the entry for the eleventh day in the diary of Katsu Kaishū, Katsu went to the naval office at Hama, and there heard for the first time what had happened at Fushimi. When he tried to ask more, the diary goes on, "the officials only went pale and looked at one another, and no one dared to open his mouth."

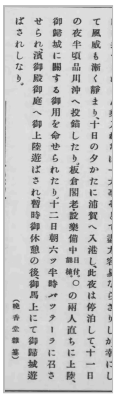
According to the account of Matsudaira Kantarō, on the twelfth Yoshinobu took a small boat, "landed at the Hama Goten Oniwa", rested for a while, and rode back to the castle on horseback.

れきしねた ガイドネタ帳 | Rekishi-Neta Guide Notes | © 2026 Rekishi-Neta

S2 海外から来たお客様 浜離宮恩賜庭園

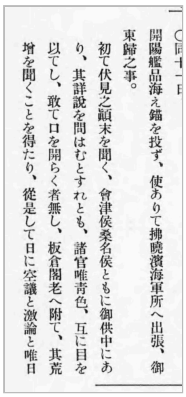
お客様用

記録の言葉



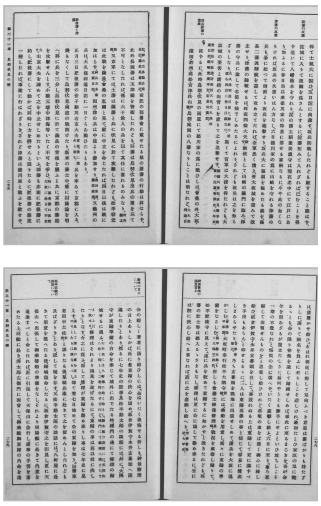
渋沢栄一『徳川慶喜公伝 巻七』（竜門社、大正7年）

十一日の夜半頃品川沖へ投錨したり。板倉閣老・設樂備中目付。能棟。の兩人直ちに上陸、御歸城に關する御用を命ぜられたり。十二日朝六ツ半時バツテーラに召させられ、濱御殿御庭へ御上陸遊ばされ、暫時御休憩の後、御馬上にて御歸城遊ばされしなり。 p.296



勝海舟『海舟全集 第9巻』（改造社、昭和3年）

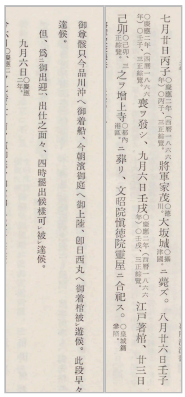
開陽艦品海え錨を投ず、使ありて拂曉濱海軍所へ出張、御東歸之事。初て伏見之顚末を聞く、會津侯桑名侯ともに御供中にあり、其詳說を問はむとすれとも、諸官唯靑色、互に目を以てし、敢て口を開らく者無し、板倉閣老へ附て、其荒增を聞くことを得たり、從是して日に空議と激論と唯日



渋沢栄一『徳川慶喜公伝 巻四』（竜門社、大正7年）

六日徳川家の爲に山崎を守れる津藩の兵も、暴に起つて側面より坂兵を砲撃せり、坂兵大に狼狽を極めたる處を、薩長二藩其精鋭を盡して攻め立てたれば、全軍悉く潰え、皆大坂城を望みて敗走せり。／六日に至り、「寧ろ東歸して恭順せんものを」と思案し給ひけれど、恭順の事をば深く御心に祕し給ひ、板倉伊賀守・永井玄蕃頭を召して、「事敗れぬる上は、東歸して更に講ずべき手段もあらん」と仰せらるゝに

p.274・278



東京都編『東京市史稿 市街篇第四十八』（東京都、昭和34年）

御尊骸只今品川沖へ御着船、今朝濱御庭へ御上陸、卽日西丸へ御着棺被遊候／九月六日／七月廿日丙子〇慶應二年／將軍家茂／大坂城／ニ薨ズ／九月六日壬戌／江戸著棺 p.137

S2 海外から来たお客様　浜離宮恩賜庭園

ガイド用 ／ お客様にはお見せしません

徳川家茂は柩となって、徳川慶喜は生きて、どちらも船で江戸へ戻った

⚠ 機微（#129）：戦争（鳥羽・伏見の戦いの敗戦）にかかわる。記録の言い方のまま扱う

⚠ 機微（#164）：将軍の死と葬送の話です。亡骸の扱いは記録の言葉のとおりにとどめ、描写を足さないでください。

読み上げる文（お客様用の紙と同じもの）

慶応二年（1866年）、将軍の徳川家茂は大坂城で亡くなりました。その柩は船で戻り、「濱御庭」に上陸します。

鳥羽・伏見の変で大坂方の兵が敗れ、明治元年（1868年）正月、徳川慶喜は艦で品川沖に戻りました。そして小舟で、「濱御殿御庭」に上陸しました。

家茂は柩となって、慶喜は生きて、どちらも船で戻ってきたのです。

In the second year of Keiō, 1866, the shogun Tokugawa Iemochi died at Osaka Castle. His coffin came back by ship and was landed at the "Hama Oniwa".

After the forces from Osaka were defeated at Toba-Fushimi, in the first month of the first year of Meiji, 1868, Tokugawa Yoshinobu came back by warship to the waters off Shinagawa. He then landed by small boat at the "Hama Goten Oniwa".

Iemochi came back in a coffin and Yoshinobu came back alive, both by ship.

慶応二年（1866年）、将軍家茂は大坂城で亡くなりました。九月六日の達（役所が出した通知や命令）には、亡骸がいま船で品川沖に着いた、と記されています。「今朝濱御庭へ御上陸」（けさ浜御庭に上陸）、その日のうちに江戸城の西丸に柩が着いた、と続きます。

『徳川慶喜公伝』によると、鳥羽・伏見の変で大坂方の兵が敗れた日、慶喜はこう言ったそうです。「事敗れぬる上は、東歸して更に講ずべき手段もあらん」（敗れた以上は、東へ帰れば、さらに打つ手もあろう）。『続徳川実紀』の引く記録によると、明治元年（1868年）正月八日、慶喜は艦で天保山沖を発ち、十一日に品川に着きました。

その十一日、勝海舟は浜の海軍所へ出向き、そこで初めて、伏見で起きたことの顛末を聞いた、と勝の日記に記されています。勝が詳しく聞こうとしたときのことを、日記はこう続けます。「諸官唯青色、互に目を以てし、敢て口を開らく者無し」（役人たちは青ざめて目を見交わし、口を開く者はいなかった）。

松平勘太郎の談話によると、十二日、慶喜は端艇という小舟に乗ったそうです。そして「濱御殿御庭へ御上陸」（浜御殿の御庭に上陸）、しばらく休んだあと、馬に乗って城へ帰りました。

In the second year of Keiō, 1866, the shogun Iemochi died at Osaka Castle. An order of the sixth day of the ninth month records that the body had just arrived by ship off Shinagawa, "landed this morning at the Hama Oniwa", and that the coffin reached the Nishinomaru of Edo Castle that same day.

According to the Tokugawa Yoshinobu-kō Den, on the day the forces from Osaka were defeated at Toba-Fushimi, Yoshinobu said: "Now that things have failed, if we return east there may be further means to take." According to a record quoted in the Zoku Tokugawa Jikki, on the eighth day of the first month of the first year of Meiji, 1868, Yoshinobu left the waters off Tenpōzan by warship, and arrived at Shinagawa on the eleventh.

According to the entry for the eleventh day in the diary of Katsu Kaishū, Katsu went to the naval office at Hama, and there heard for the first time what had happened at Fushimi. When he tried to ask more, the diary goes on, "the officials only went pale and looked at one another, and no one dared to open his mouth."

According to the account of Matsudaira Kantarō, on the twelfth Yoshinobu took a small boat, "landed at the Hama Goten Oniwa", rested for a while, and rode back to the castle on horseback.

お客様にとっての発見

大坂城で亡くなった将軍家茂の柩は「濱御庭」に、艦で天保山沖から戻った慶喜は「濱御殿御庭」に、どちらも海から上陸したと記録されています。お客様は、柩となって戻った将軍と、生きて戻った慶喜の二つの上陸を、記録の言葉で聞き比べることになります。

語り方のコツ

- **「二人は、同じ所に上がったのか」と尋ねられたら**
  > 「同じ所だとは、記録には記されていません。家茂の柩は『濱御庭』、慶喜は『濱御殿御庭』と記されています」とお答えください。
- **「松平勘太郎とは誰か」と尋ねられたら**
  > 「当時、大隅守信敏と名乗り、大坂町奉行だった人です。『徳川慶喜公伝』の編者の注に、そう記されています」とお答えください。
- **「『将軍お上がり場』は、本当に慶喜が上がった所か」と尋ねられたら**
  > 「そう伝えられています。東京都の庭園の計画書にある説です」とお答えください。

れきしねた ガイドネタ帳 | Rekishi-Neta Guide Notes | © 2026 Rekishi-Neta

S2 海外から来たお客様　浜離宮恩賜庭園

ガイド用 ／ お客様にはお見せしません

どこまで断定してよいか

断定してよい

家茂の柩と浜御殿について

- 九月六日付の目付への達は、将軍家茂の亡骸が品川沖に着き、今朝浜御庭へ上陸し、即日西丸へ着棺したと伝えた（東京都編『東京市史稿 市街篇第四十八』）

慶喜の帰りについて

- 「或記」の書き手は、慶喜の跡を追って出発し、辰の刻ごろ開陽丸に乗り込んだと書いた（成島司直等編・経済雑誌社校『続徳川実紀 第5篇』）
- 「或記」は、慶喜が八日に天保山沖を艦で発ち、十一日に品川に着艦し、十二日に浜御殿へ上陸したと書いた（同）
- 松平勘太郎は、慶喜が十二日に端艇（バッテーラ）で浜御殿の御庭へ上陸し、しばらく休んで馬で城に帰ったと語った（渋沢栄一『徳川慶喜公伝 巻七』）
- 松平勘太郎は当時、大隅守信敏と称し、大坂町奉行だった（同）

鳥羽・伏見の変について

- 勝海舟は日記に、浜の海軍所で初めて伏見の顛末を聞いたと書いた（勝海舟『海舟全集 第9巻』）
- 同じ日記は、詳しく問おうとしても諸官は青ざめて目を見交わし、口を開く者がなかったと書く（同）
- 鳥羽・伏見の変の六日、坂兵（大坂方の兵）は全軍潰えて大坂城へ敗走した（渋沢栄一『徳川慶喜公伝 巻四』）
- 同じ日、慶喜は「事敗れぬる上は、東歸して更に講ずべき手段もあらん」と言った（同）

「そう伝えられています」と置く

- 東京都の保存活用計画は、将軍お上がり場を、慶喜が大坂から船で帰って上陸した地とする（東京都「旧浜離宮庭園の保存活用計画」）

★言わない

- 家茂の柩と慶喜が、同じ庭に上がったと言わないでください
- 勝海舟（かつかいしゅう）の日記の「濱海軍所」を、この庭だと言わないでください
- 慶喜の気持ちを、記録にある本人の言葉を超えて言わないでください

この物語のもとになった小ネタ

- #129　家茂の柩は浜御庭へ、慶喜は浜御殿の御庭へ、船から上陸した
- #164　徳川家茂（とくがわいえもち）の柩（ひつぎ）は浜御庭から城に入り、増上寺へ葬られることになった

番号は小ネタの紙の番号です。詳しくは、それぞれの小ネタの紙で。

記録の言葉

ほか引用 2 件は紙に載せていません（2ページに収めるため）

原本の画像を 8 枚載せていません（2ページに収めるため）

お客様用の紙には、原本の画像を 4 枚載せていません（2ページに収めるため）

成島司直等編・経済雑誌社校『続徳川実紀 第5篇』（経済雑誌社、明治40年） 一次

> 予輩も丑の半剋頃。御跡より出發。同時過天滿橋より川舟乘込。辰の剋頃開陽丸に乘込。 p.1596
>
> 八日朝天保山沖御發艦。御東歸。同月十一日品川へ御着艦。十二日未明より濱御殿江御上陸。夫より御馬にて p.1596

渋沢栄一『徳川慶喜公伝 巻七』（竜門社、大正7年） 一次

> 十一日の夜半頃品川沖へ投錨したり。板倉閣老・設樂備中目付。能棟。の兩人直ちに上陸、御歸城に關する御用を命ぜられたり。十二日朝六ツ半時バツテーラに召させられ、濱御殿御庭へ御上陸遊ばされ、暫時御休憩の後、御馬上にて御歸城遊ばされしなり。 p.296

勝海舟『海舟全集 第9巻』（改造社、昭和3年） 一次

> 開陽艦品海え錨を投ず、使ありて拂曉濱海軍所へ出張、御東歸之事。初て伏見之顚末を聞く、會津侯桑名侯ともに御供中にあり、其詳說を問はむとすれとも、諸官唯靑色、互に目を以てし、敢て口を開らく者無し、板倉閣老へ附て、其荒增を聞くことを得たり p.117

渋沢栄一『徳川慶喜公伝 巻四』（竜門社、大正7年）

> 六日徳川家の爲に山崎を守れる津藩の兵も、暴に起つて側面より坂兵を砲撃せり、坂兵大に狼狽を極めたる處を、薩長二藩其精鋭を盡して攻め立てたれば、全軍悉く潰え、皆大坂城を望みて敗走せり。／六日に至り、「寧ろ東歸して恭順せんものを」と思案し給ひけれど、恭順の事をば深く御心に祕し給ひ、板倉伊賀守・永井玄蕃頭を召して、「事敗れぬる上は、東歸して更に講ずべき手段もあらん」と仰せらるゝに p.274・278

東京都編『東京市史稿 市街篇第四十八』（東京都、昭和34年）

> 御尊骸只今品川沖へ御着船、今朝濱御庭へ御上陸、即日西丸へ御着棺被遊候／九月六日／七月廿日丙子〇慶應二年／將軍家茂／大坂城／ニ薨ズ／九月六日壬戌／江戸著棺 p.137

れきしねた ガイドネタ帳 | Rekishi-Neta Guide Notes | © 2026 Rekishi-Neta